

六ッ美南部の名木

・日長神社のむくろじ

むくろじ（無患子）はむくろじ科むくろじ属の落葉高木である。日当りがよく湿りけの多い山中に生える。寺社あるいは屋敷林に植えることも多い。樹皮は灰褐色で平滑。老木になると不規則に剥がれる。葉は大きな偶数羽状複葉で、互生する。小葉は4~8対あり、広披針形で革質。左右がややずれて対生する。縁は全縁で大きく波うつ。花はとても小さく、5~6月頃に咲き、咲き終わると雨のように降ってくる。11月には実が黄色く熟す。果実は約2cmの球形で、中に黒い種子が1個ある。冬に、むくろじの木の下を歩くと、落ちた実がたくさん見つかる。果皮はサポニンを含み、碎いて水に晒すと泡立つ。かつては石鹼の代用とされたため井戸端などによく植えられた。中の黒い種子は数珠や、羽根突きの玉に用いられた。果皮に配糖体ムクロジサポニンがある（胃腸障害、下痢）。



日長社むくろじA 20150727



日長社むくろじA 20151010



日長神社むくろじB 20151018



日長社 むくろじ花 5月



日長社 むくろじ実 10月 20151010

・八幡社のおがたまの木

招靈（おがたま）の葉は倒卵状橢円形でやや肉厚の革質、表面には強い光沢がある。2~4月にかけて芳香の強い直径3cm程度の花冠が帯黄白色で基部がやや紅紫色を帯びた花を、枝の先端近くの葉腋につける。



八幡神社 招靈の木 20150727



招靈の葉

通常樹高は10~15mの高木であるが、樹齢数百年を越した木には20m以上に達するものも少なくない。また、ミカドアゲハの食樹としても知られている。



招靈の花

・淨光寺のいちょう

いちょう（銀杏）は中国原産である。街路樹など、全国で普通に見かける樹木であるが、分類上は奇異な位置にあり、例えば広葉樹・針葉樹の区分では如何にも広葉樹に該当しそうだが、むしろ特殊な針葉樹にあたる。銀杏科の植物は中生代から新生代にかけて世界的に繁栄し、世界各地で化石が出土しているが、氷河期にほぼ絶滅し、銀杏は唯一現存する種である。

淨光寺の銀杏は昭和50年に岡崎市の天然記念物指定を受けた。銀杏は市内最大で、高さ200m、幹回り4m、根回り8m、枝張り15mある。



淨光寺の銀杏



・淨光寺のはまぼう

はまぼう（浜朴あるいは黄槿）の樹高は1-5mほどの低木だが、枝はよく分かれ、株の内側はうっそうと茂る。周囲に障害がない所ではしばしば横に広がり、直径5mほどになる。葉は枝に互生すし、直径3~8cmほどの円に近いハート形で、やや厚く、縁に細かい鋸歯がある。葉の裏や細い枝には灰白色の細毛が密生する。幹は灰色で多数の皮目がある。根は深くないが、倒れてもすぐ発根する。

淨光寺のはまぼうは昭和60年に岡崎市の天然記念物指定を受けた。はまぼうは樹齢65年と推定され、1930（昭和5）年の春、西尾市の名倉闇一郎氏が渥美半島の自生地から幼苗を取り寄せたものである。以前は、樹高が6m以上もあったが台風によって幹が途中で折れ、萌芽した若枝により一見株立ちの樹姿であるが、根元は老木を思わせる。7月下旬に黄色い花が咲く。



・崇福寺のカマクラヒバ

崇福寺の境内には、カマクラヒバがあり、樹齢は不明であるが、かなりの年数を経た古木である。庭の景観樹として仕立てられ、ヒバの特性を活かした均整のとれた樹姿である。樹高9.5m、幹回り1.2m、根回り1.5m、枝張り4.5mである。ヒバは本堂の西側で、周囲を庫裡に続く建物で囲まれた中庭に位置する。崇福寺の中庭にあるため、寺の建物の外側からは見ることができない。



カマクラヒバは、ヒノキの園芸品種の一つである。葉は密生し樹形も自然に円筒系または円錐形となる。同じ園芸品種で、より小形のチャボヒバとヒノキの中間的形態を持つ。和風庭園で自然樹形は背景を構成する樹木として利用され、また仕立物は造形的な景観を作る樹木として利用されてきた。比較的生長も遅く、刈込みに耐えて整形の樹形に作れる。

・六ツ美南部小学校の栴檀

六ツ美南部小学校の校庭の北東側には栴檀の木があり、樹齢は100年を過ぎているようである。栴檀の木の樹高は5~15mほどで、成長が早い。若い樹皮は紫褐色で楕円形の小さな横斑が点在するが、太い幹の樹皮は縦に裂け、顕著な凹凸ができる。夏の日の午後は梢にクマゼミが多数止まり、樹液を吸う様子が見られる。葉は奇数2~3回羽状複葉で互生し、一枚の葉全体の長さは50cm以上ある。小葉は草質で薄い。楕円形で浅い鋸歯がある。5~6月頃に、若枝の葉腋に淡紫色の5弁の花を多数、円錐状につける。花にはアゲハチョウ類がよく訪れる。なお、南方熊楠が死の直前に「紫の花が見える」と言ったのはセンダンのことと言われている。果実は長径1.5~2cmほどの楕円形の核果で、10~12月頃に黄褐色に熟す。秋が深まり落葉してもしばらくは梢に果実が残る。果実は果肉が少なく核が大きい。たまにヒヨドリなどが食べに訪れる。しかしサポニンを多く含むため、人、犬が食べると中毒を起こし摂取量が多いと死に至る。



栴檀の木 20150802



栴檀の葉



栴檀の花



栴檀の実

・正名のくろがねもち

くろがねもちは高木に分類されるものの、自然状態での成長は普通10m程度にとどまり、あまり高くならない。明るいところを好む。葉は革質で、橢円形でやや波打つことが多く、深緑色である。表面につやがある。若い茎には陵があり、紫っぽく色づくことが多い。春4月に新芽を吹き、葉が交替する。雌雄異株で、花は淡紫色、5月から6月に咲く。たくさんの果実を秋につける。果実は真っ赤な球形で、直径6mmほどである。

しばしば、庭木としても用いられ、比較的都市環境にも耐えることから、公園樹、あるいは街路樹として植えられる。「くろがねもち」が「金持ち」に通じるから縁起木として庭木として好まれる地域もある。西日本では野鳥が種を運び、庭等に野生えすることがある。材木は農機具の柄としても用いられる。

正名町の「くろがねもち」は県下有数の大きさで、推定樹齢が250年以上ある。家屋に接した独立樹であり、枝下は高く、「くろがねもち」特有の大枝を有する。樹冠の広がりは、同種とは異なる独特の姿である。樹高18m、枝張りは左右前後に17mに及んでいたが、現在は刈り込まれて全体に小さくなっている。



正名町のくろがねもち 20150807



正名町のくろがねもち 20150807



くろがねもちの花



くろがねもちの実





本項は以下の資料を引用している。

[わたしたちのふるさと 六ツ南114選]

監修者 総代会長 平井 良美
 社教委員長 近藤 武美
 著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6年児童 114名
 (平成25年3月19日卒業)
 編者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6年担任
 権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛
 発行日 2013(平成25)年3月1日 初版発行
 印刷所 ブラザーリントン株式会社
 製本 ブラザーリントン株式会社
 発行 岡崎市立六ツ美南部小学校